

常用辞書における連体詞の認定について

田村 泰男

1. はじめに

連体詞は、活用のない自立語で、体言の修飾だけを担う品詞と定義される。いわゆる学校文法でいうところの十品詞の一つであるが、文法の研究対象として登場したのが他の品詞に比べて遅かったため、品詞として認めるか否か、認めるにしてもどのような性格を以て連体詞とするのかという点において、今もなお研究者によって異同が見られる。連体詞が品詞として認められるのが遅れた理由として、鈴木(1984)は、口語についての研究の遅れと連体詞の数が比較的少ないという点を挙げている¹。

連体詞を一つの品詞として見た場合、その一般的な要件として、鈴木(1984)では次の三点を挙げているが²、厳密な意味においては、その認定基準は定まっていない。

- ・一つの単語と考えられる
- ・活用はしない
- ・連体修飾という職能を持つ

例えば、「例の件」「実の親」のような「字音語+の」の語形をもつ語、「呪われた館」「思い切った行動」に見られる動詞から出た連体修飾語、「見知らぬ人」「良からぬ考え」などの連体修飾機能をもつ語などをどう扱うのか、判断基準のはっきりしない語は多い³。

そこで本稿では、常用辞書における連体詞の認定状況を調べることによって、現況を明らかにし、連体詞の認定基準を構築していくための一助としたいと思う。

2. 常用辞書における調査

2.1 調査方法

調査対象としたのは、次の五つの常用辞書である。

新明解国語辞典第6版(2005)、旺文社国語辞典第10版(2005)、岩波国語辞典第四版(1986)、福武国語辞典初版(1989)、明鏡国語辞典初版(2002)

調査にあたっては、先ず新明解と旺文社版で「連体詞」「連体詞的」と記載のある語を全て抜き出し、次に他の三つの辞書でそれらがどのように記述されているかを調べた。

調査結果は次の四つに分類し、(表1)にまとめた。

- 見出し語または子見出し語として存在し、「連体詞」と認定されている語
- △ 見出し語または子見出し語として存在し、「連体詞的」と記述がある語
- × 見出し語または子見出し語として存在するが、「連体詞」とも「連体詞的」とも記述がない語

－ 見出し語・子見出し語のいずれにも存在しない場合

2.2 調査結果

調査結果を一覧にしたものが（表1）である。

（表1）常用辞書における連体詞の認定について

	新明解	旺文社	岩波	福武	明鏡
1. 愛すべき	○	－	－	－	－
2. 開かずの	○	－	－	－	－
3. 飽く無き	－	○	△	－	○
4. 明くる	○	○	○	○	○
5. 明けやらぬ	○	×	－	－	－
6. 当たる	○	×	×	×	×
7. あの	○	○	○	○	○
8. 天津	○	○	×	－	×
9. 荒くれた	○	－	△	×	－
10. あらぬ	○	○	○	○	○
11. あらゆる	○	○	○	○	○
12. 有り得べき	○	○	－	×	－
13. 有り得べからざる	○	－	－	－	－
14. 在りし	○	○	○	○	×
15. 有りとあらゆる	○	○	×	×	○
16. ある	○	○	○	○	○
17. あるべき	○	○	－	×	△
18. 有るまじき	○	○	×	×	△
19. あんな	○	×	○	○	×
20. いかな	○	○	○	○	○
21. いかなる	○	○	○	○	○
22. 生ける	×	○	○	○	×
23. 至らぬ	○	×	×	－	×
24. いっかな	×	○	×	○	○
25. 一昨	○	×	×	×	×
26. 異な	○	○	○	○	○

27. 要らざる	—	○	—	—	—
28. 要らぬ	—	○	—	—	—
29. 色好い	○	○	×	○	○
30. 色んな	○	○	○	○	○
31. いわゆる	○	○	○	○	○
32. うい	○	○	○	○	○
33. 浮いた	—	○	—	—	—
34. 生みの	○	—	—	—	—
35. えもいわれぬ	○	×	△	×	×
36. 大いなる	○	○	○	○	○
37. 大きな	○	○	○	○	○
38. おかしな	○	○	—	○	○
39. 沖つ	○	—	×	—	○
40. 恐るべき	×	○	×	○	×
41. 思い切った	○	○	—	○	△
42. 重立った	○	—	—	—	○
43. 思わぬ	○	—	—	—	—
44. 該	○	×	×	×	×
45. かかる	○	○	○	○	○
46. 確たる	○	○	○	○	○
47. 確とした	○	—	—	×	△
48. 数ならぬ	○	×	△	○	—
49. かの	○	○	○	○	○
50. 考うべき	○	—	—	—	—
51. 来る	○	○	○	○	○
52. 来るべき	○	—	—	—	—
53. 決まり切った	—	○	×	—	○
54. くしき	○	○	○	○	○
55. 巖たる	—	○	—	—	—
56. ここな	○	○	△	—	—
57. 心有る	○	○	△	○	○
58. この	○	○	○	○	○
59. こん	○	—	—	—	—
60. こんな	○	×	○	○	×

61. 最たる	○	○	○	○	○
62. さしたる	○	○	○	○	○
63. させる	○	○	○	—	○
64. 更なる	○	○	—	—	○
65. さらぬ	—	○	×	—	—
66. 然る	○	○	○	○	○
67. 去る	○	○	○	○	○
68. 去んぬる	○	○	○	—	○
69. しかるべき	○	○	△	×	△
70. 実の	—	○	△	○	○
71. 主たる	○	○	—	○	—
72. 知れきった	○	—	—	—	—
73. 真の	○	—	△	○	—
74. 好いた	○	—	—	—	—
75. 過ぎし	○	—	—	—	—
76. 少なからぬ	○	—	—	—	—
77. 過ぐる	○	—	—	—	—
78. ずぶの	○	—	—	—	○
79. 聖なる	○	○	—	—	—
80. 切なる	○	○	—	—	○
81. そういう	○	○	—	—	○
82. そうした	○	○	—	—	○
83. そこな	○	○	△	○	○
84. 素知らぬ	○	○	△	○	○
85. その	○	○	○	○	○
86. そんな	○	×	○	○	×
87. 大した	○	○	○	○	○
88. 大それた	○	○	○	○	○
89. 大の	○	○	△	△	○
90. 玉の	○	—	—	—	—
91. 単なる	○	○	○	○	○
92. 小さな	○	○	○	○	○
93. ちっちゃな	○	—	—	—	—
94. 直な	○	—	○	—	—

95. ちょっとした	○	○	—	—	○
96. 尽きせぬ	○	×	△	×	○
97. つまらぬ	—	○	×	—	—
98. とある	○	○	○	○	○
99. どういう	○	—	—	—	—
100. 当該	○	△	○	○	×
101. 当の	○	○	△	○	○
102. 時ならぬ	○	×	△	—	—
103. どの	○	○	○	○	○
104. とんだ	○	○	○	○	○
105. どんな	○	×	○	○	×
106. 長の／永の	—	○	△	○	○
107. 名だたる	○	○	○	○	○
108. 並み居る	○	×	×	×	×
109. 何たる	○	○	—	○	○
110. 何の	○	×	×	×	×
111. 似て非なる	○	×	△	×	×
112. 寝ずの	○	—	—	—	—
113. 残んの	○	○	×	—	○
114. 呪われた	○	—	—	—	—
115. 一方ならぬ	—	○	—	—	○
116. 人知れぬ	○	×	—	○	○
117. びょうたる	○	○	—	—	○
118. ひよんな	○	○	○	○	○
119. ふとした	○	○	—	○	—
120. 冬ざれた	○	—	—	—	—
121. ほんの	○	○	○	○	○
122. 待ちに待った	△	×	△	×	×
123. 見知らぬ	○	○	—	—	○
124. 道ならぬ	○	—	△	—	○
125. 見果てぬ	○	—	△	×	○
126. 見も知らぬ	○	—	—	—	—
127. 明後	○	×	×	×	×
128. 明明後	○	—	—	—	—

129. 見るべき	○	—	—	—	—
130. むくつけき	○	—	—	○	○
131. 宗との	○	—	—	—	—
132. 無理からぬ	○	○	○	○	○
133. 持って生まれた	△	—	—	—	×
134. 持って回った	△	—	×	×	×
135. 元	○	×	×	×	×
136. 物さびた	○	—	—	—	—
137. 病める	×	○	×	×	×
138. 良からぬ	○	×	—	—	—
139. 例の	○	○	△	○	○
140. れっきとした	○	—	—	○	×
141. ろくな	—	○	○	○	○
142. 我が	○	○	○	○	○
143. わりない	○	×	×	×	×

2.3 考察

(1) 辞書別に見た場合の連体詞認定語数をまとめたものが(表2)である。

(表2) から分かるように、辞書によって連体詞の認定語数が大きく異なっている。特に、新明解と岩波では2倍近い開きがあり、岩波では連体詞を多く認めないかわりに、連体詞的という記述によって文法機能の説明を加えている。辞書間で認定語数に大きな違いが見られるということは、連体詞に属する語が確定されていないということであり、品詞としては不安定な位置にあると言える。

(表2) 辞書別連体詞認定語数

	連体詞	連体詞的
新明解国語辞典第6版	124語	3語
旺文社国語辞典第10版	83語	1語
岩波国語辞典第四版	47語	21語

福武国語辞典初版	64語	1語
明鏡国語辞典初版	71語	5語

(2) 次に、収集された143語のうち、何語がいくつの辞書によって連体詞と認定されているかを記す。

五つの辞書において連体詞として認定された語	36語
四つの辞書において連体詞として認定された語	12語
三つの辞書において連体詞として認定された語	24語
二つの辞書において連体詞として認定された語	21語
一つの辞書において連体詞として認定された語	47語
「連体詞的」とのみ記述がある語	3語

五つの辞書全てにおいて連体詞と認定されている語は36語で、「連体詞的」とのみ記述がある3語を除く140語中25.7%を占めるにすぎず、四つの辞書で認定を受けた12語を加えても34.3%ほどである。このことは、まだ多くの語が連体詞に分類されるか否かで揺れていることを示しており、辞書記述においては連体詞の認定が編者の考えに大きく依存していることの証左となっている。

(3) 鈴木(1984)⁴との比較

鈴木(1984)においても8種の辞書を使って同様の調査がなされており、次のような結果となっている。

I 8種の辞書すべてが連体詞として認定する語(21語)

あくる、あらゆる、ある、いかな、いかなる、いろんな、いわゆる、大きな、かかる、かの、来る、さしたる、させる、さる、大した、とある、とんだ、名だたる、ひよんな、本の、わが

II 7種の辞書で認定されている語(5語)

あの、この、その、どの、大それた

III 5種の辞書で認定されている語(8語)

色好い、大いなる、ここな、心ある、そこな、大の、当該、当の

IV 4種の辞書で認定されている語(6語)

ありとあらゆる、おかしな、おなじ、該、実の、そうした

鈴木は、「今日、多くの人的一致して連体詞として考えるものは、このⅠとⅡに含まれる25語あたりではなからうか。」と述べているが、このⅠグループとⅡグループを本稿での調査結果に当てはめてみると、「させる」を除く全ての語が、五つの辞書全てにおいて連体詞として認定されている語群に含まれている。「させる」に関しても四つの辞書が認定しているわけであるから、多くの語で認定に関して揺れはあるものの、核となる語群は存在していると言える。

3. まとめ

今回の調査からも分かるように、連体詞の認定に関しては、基本的な語彙は存在するものの、まだ多くの語において揺れが見られる。今後の課題としては、用例を幅広く集め、語構造やその出自、当該の語がどの種の体言を修飾するのか、連体修飾以外の文法機能があるか否か、などを精査する必要があるだろう。また、成句やそれが語彙的に固定したものなのかどうか、という点も考慮に入れる必要があろう。

注

1 鈴木(1984) p.67

2 同上 p.72

3 cf. 『日本語教育ハンドブック』 pp.458-460

『新版日本語教育事典』 pp.89-90

4 鈴木(1984) pp.75-77

調査に用いられた辞書は次の通り。

岩波国語辞典(三版)、学研国語大辞典、広辞苑(三版)、三省堂国語辞典、新潮国語辞典(改訂版)、新明解国語辞典(三版)、日本国語大辞典、例解国語辞典

参考文献

鈴木英夫 「連体詞の諸問題」『研究資料日本語文法第4巻』, 明治書院, 1984.

日本語教育学会編 『日本語教育ハンドブック』, 大修館書店, 1990.

日本語教育学会編 『新版日本語教育事典』, 大修館書店, 2005.

松下大三郎 『改撰標準日本文法』, 勉誠社, 1978 復刊.